

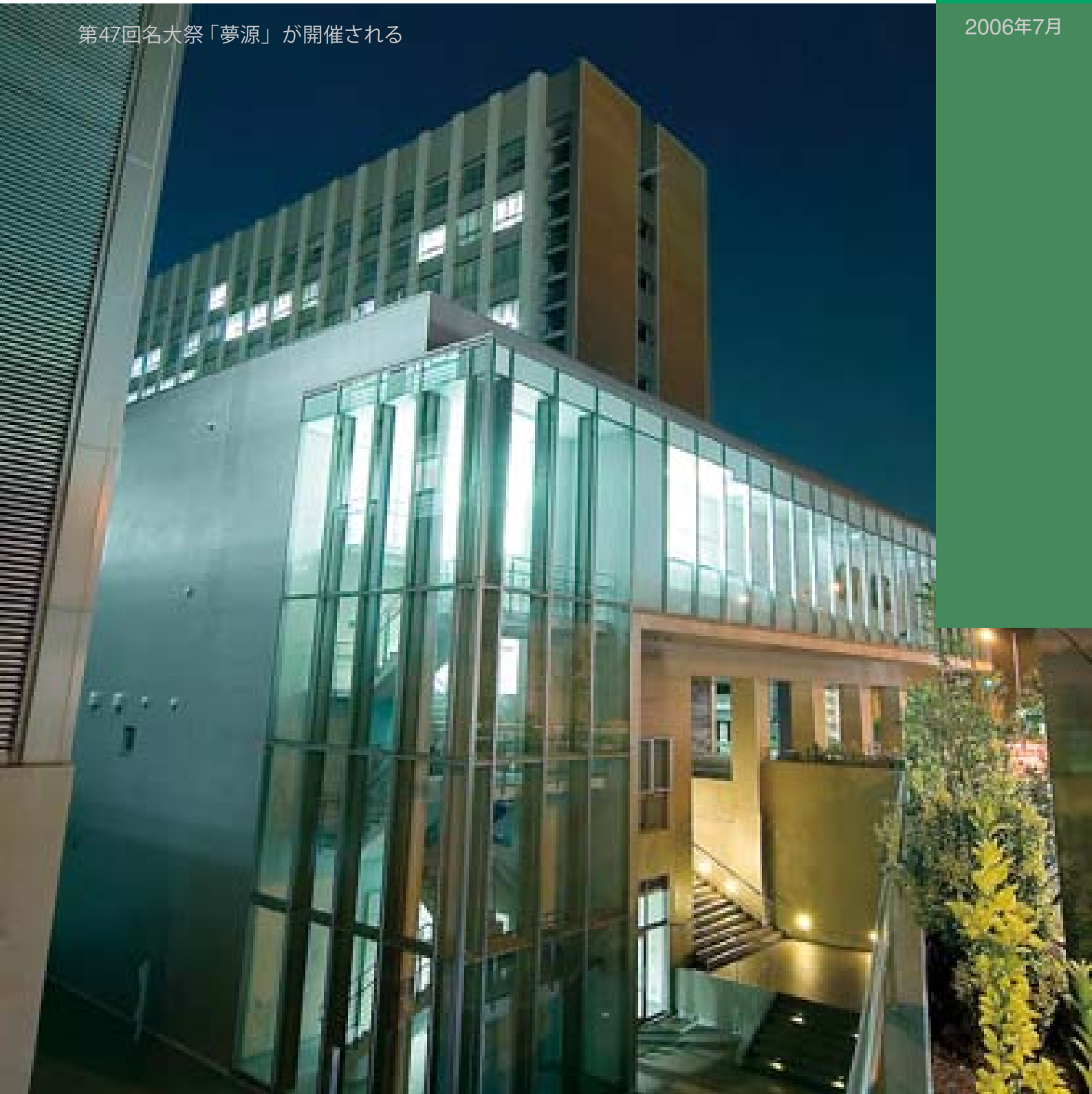
名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.158

2006年7月

第47回名大祭「夢源」が開催される



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

51 日本学士院賞と名古屋大学

日本学士院は、1879（明治12）年に福沢諭吉を会長に創立されて以来の歴史を持ち、現在は学術上の功績顕著な科学者を優遇するための文科省特別機関として、さまざまな事業を行っています。そして同院が授与する日本学士院賞は、日本の学術賞としては最も権威ある賞です。

名古屋大学における歴代受賞者は、広報室が毎年発行している『名古屋大学プロフィール資料編』に一覧が掲載されています。名大史上の初受賞は、1926（大正15）年、当時愛知医科大学（医学部の前身）教授、のち名大第3代総長となる勝沼精蔵名誉教授です。以来、恩賜賞を含め、これまで22人が日本学士院賞（戦前は帝国学士院賞）を受賞しているとされてきました。その中には、ノーベル賞を受けた野依良治特別教授の名前もあります。

しかしこのたび、附属図書館医学部分館長の山内一信教授から、『プロフィール』の一覧は小口忠太名誉教授の名前が落ちているのではないかとの指摘がありました。

小口名誉教授は眼科を専門とし、1919年に愛知県立医学専門学校講師となり、1923年には愛知医科大学学長に就任しています。1939（昭和14）年、名古屋帝国大学の教授となり、その直後に定年退官しました。小口病の発見で国際的にも著名な医学者です。

大学文書資料室で調査したところ、1933年に小口が受賞したのは、厳密には「帝国学士院賞」ではなく、帝国学士院が授与する「大阪毎日新聞東京日日新聞寄附東宮御成婚記念賞」であることが分かりました。東宮（皇太子）、のちの昭和天皇の結婚を記念して創設された賞です。

ただ当時の帝国学士院賞にしても三井家と岩崎家からの寄付によるものであり、さらに1944年には同記念賞と帝国学士院賞が合併しているのですから、これを学士院賞受賞者としてもさしつかえないと思います。

先月発行の本年度版『プロフィール』には、小口忠太の名前を載せました。受賞者は23人となったわけです。



- 1 小口忠太（1875－1945）とその胸像（『日本医学のパイオニア（1）』より）。胸像は退官記念に門下生が製作し、名古屋帝国大学に置かれたが、空襲によって破壊されてしまった。
- 2 勝沼精蔵（1886－1963）。1949年から59年まで10年にわたり総長を務め、1954年には文化勲章を受けた。
- 3 野依良治特別教授。1995年に日本学士院賞を受賞した後、2001年にノーベル化学賞を受けた。
- 4 『名古屋大学プロフィール資料編』（2004～2006年）。名大の基礎データを網羅しており、学外者への利便と同時に、学内者も重宝する一冊である。

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.159

2006年8月

第3回 AC21国際フォーラム2006を開催



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

52 夏目漱石（金之助）「祝辞」横額 一五高創立10周年記念祝辞一

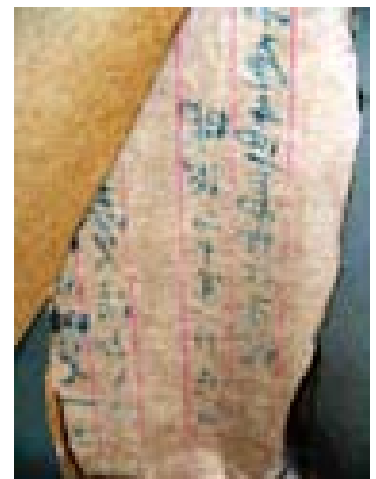
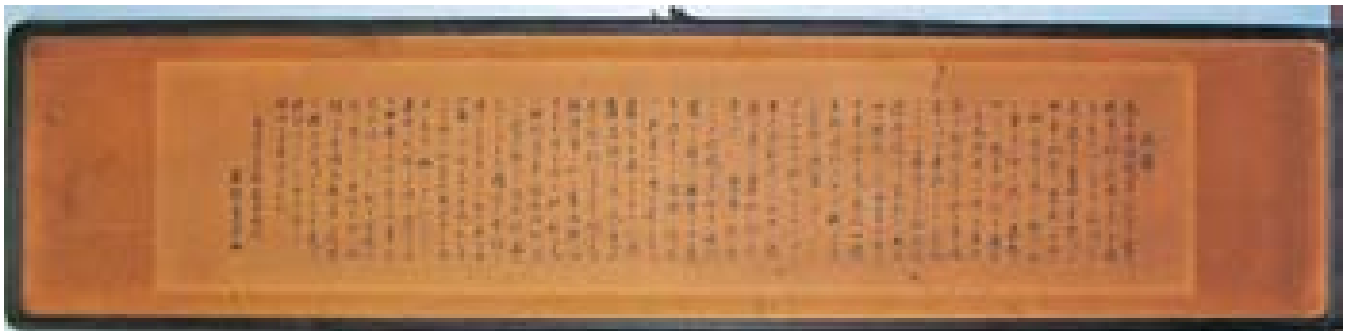
2006（平成18）年6月、大学文書資料室あてに一通の電子メールが届きました。差出人は本学名誉教授で、約20年前に本学職員クラブ内の一室にあった横額についての照会でした。その横額には旧制第五高等学校（五高）教員時代の夏目漱石（金之助）が述べた訓辞らしいものが書かれていたが、それは当時のままに現存するのかというものです。今回は、この情報をもとに行った調査で明らかになったことを紹介します。

現場確認の結果、職員クラブ内に漱石の横額はありませんでした。当時の様子を知っている職員から、かつて確かに横額はあったが、約10年前に職員クラブで小火があった際に焼失したようだとの推測情報を得ただけでした。そこで、職員クラブ建物を管理する部署にも尋ねましたが、その場では具体的な情報は得られませんでした。しかしその後、同部署から、キャンパス内の別の場所に保管されていた横額を発見したとの連絡がありました。縦36cm×横158cmの横額（写真1）には、1897（明治30）年10月10日に五高（熊本大学前身校）の創立10周年記念式で、漱石

が教員総代として述べた祝辞が書かれていました。一見して、文字は肉筆ではなく印刷のようで、残念なことに横額裏面に数個の破損箇所がありました。

熊本大学の五高記念館に尋ねたところ、この漱石の「祝辞」原本（漱石の直筆ではなく代筆と思われる。写真2）は同館に保存されていること、約20年前に開催された五高100周年記念式典の際には同祝辞の複製品が作成・頒布されたことなどが判明しました。これによって、本学内にある漱石の横額は複製品であることが明らかになりました。

一方、横額裏面の破損部分から、額装部材に「明治二十年一月廿一日」と筆書きされた罫紙が利用されていることが判明しました（写真3、4）。これによって、約20年前に作成・頒布された複製品の横額部材に上述のような罫紙が利用されることは通常考えられないこともあって、その作成時期は不明のままです。また、何よりもこの横額がどのような経緯で本学に存在するのかについても明らかではありません。



1 本学シンポジオン内の倉庫に保管されていた横額
 2 五高記念館に保存されている「祝辞」原本（熊本大学五高記念館ウェブページより）
 3、4 横額裏面の破損部分からみえる罫紙

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.160

2006年9月

名古屋大学オープンキャンパスを開催



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

53 航空医学から宇宙医学へ

宇宙空間という未知の環境が宇宙飛行士の身体に及ぼす影響の解明は、スペースシャトルや宇宙ステーションなどの有人宇宙開発における最も重要な研究課題の一つです。こうした宇宙医学の基礎となったものに、高高度における高速飛行という、かつては未知であった環境における人体を研究する航空医学があります。

名大における航空医学研究の歴史は古く、名古屋帝国大学として創立された翌年の1940（昭和15）年には、医学部に航空医学二講座が開設され、1943年にはこれらが航空医学研究所（大学附置）として独立しました。時は太平洋戦争下、日本の財政は破綻寸前でしたが、航空戦力の増強が急務とされた当時、航空医学は軍部にとっても必要不可欠な学問だったのです。

敗戦後、日本の非軍事化を進めたGHQ / SCAP（連合国軍最高司令官総司令部）の指示により、航空医学研究所の廃止が決定されました。しかし渋沢元治総長は文部大臣

や大蔵大臣と直接交渉し、縮小改組のうえ、環境医学研究所として存続させることにかろうじて成功したのです。

その後、1960年に航空医学部門が復活し、1970年代後半からは、宇宙医学の研究に積極的に取り組むようになり、1991（平成3）年には附属施設として、宇宙医学実験センター（～2005年度）が設置されました。

1992年、環境医学研究所は、日本人初の宇宙飛行士、毛利衛さんが搭乗したスペースシャトル・エンデバー号を利用して、NASA（アメリカ航空宇宙局）などとの共同で鯉を用いた宇宙酔いの実験などを行いました。また、1994年に向井千秋さんが乗ったコロンビア号における、有名な金魚による実験も同研究所が参画したものです。

9月30日に「宇宙から地球へ」をテーマに開催される第2回ホームカミングデーでは、毛利さんや向井さんからのビデオメッセージ上映、毛利さんが環境医学研究所で実際に使った無重量実験装置の展示などを行います。



1	3
2	

- 45年ほど前の環境医学研究所。現在の理学部E館と環境総合館の間あたりにあった。1966（昭和41）年に現在の場所（野依記念学術交流館裏）へ移転した。
- 創設当時の航空医学研究所（看板）。当初は名古屋市東区西二葉町（現在は東区白壁、県立明和高校のキャンパス）にあったが、まもなく東山キャンパスに移転した。
- 準無重量実験装置。当時は日本で唯一の実験装置として知られ、毛利飛行士も本学を訪れた。

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.161

2006年10月

平野総長が中国の東北大学を訪問し名誉教授の称号を受ける
平野総長が吉林大学創立60周年記念式典に招待される



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

54 「名古屋医科大学」「名古屋帝国大学」等の学印

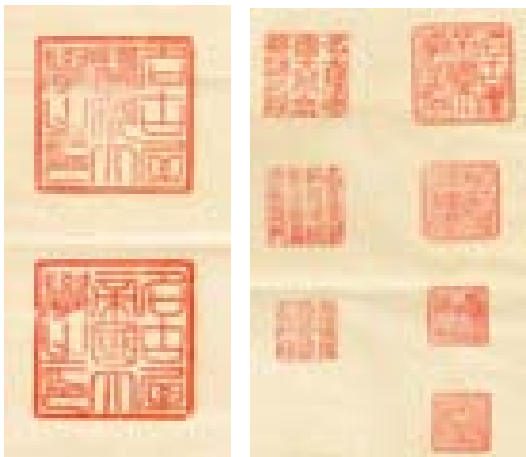
2006(平成18)年2月、総務広報課(現在の総務課)内で、すでに廃印となった公印等28本が箱に収められて書棚奥に保管されていたことが確認されました(写真1)。

これら28本の印鑑とともに保管されていた1957(昭和32)年1月29日付の原議書「印鑑の保存について」によると、それら28本のうち9本の印鑑については「廃印となっている別紙押捺の印鑑今後とも永久に保存する」とこととされています(写真2)。「名古屋医科大学」「名古屋帝国大学」(2種)「名古屋帝国大学総長」「名古屋帝国大学事務局長」「名古屋帝国大学庶務課長」「名古屋帝国大学庶務課」「名古屋大学教員適格審査委員会委員長」「普通試験委員長」の印鑑がそれです(写真3、4)。

ここでは、「名古屋医科大学」(名医大)と「名古屋帝国大学」(名帝大)の学印について紹介します。名医大(1931-1939)および名帝大(1939-1947)は、いずれも名古屋大学の前身校です。写真5には二つの石印が写っていますが、左下にあるのが名医大の印面で、右上にあるのが名帝大の印面です(印影は写真3、ともに印面外寸は60mm平

方)。この写真ではわかりにくいですが、名帝大のものは印材に亀裂が入っているため風糸が巻かれており、その他の部分にも少なからぬ損傷があります。一方、名医大のものは印材の厚みが1.5cm程度しかなく、印面裏側には鋸で切断されたような痕跡がみられます。おそらく名帝大の学印は、前身校である名医大の学印を切り落とした印材を再利用したものと考えられます。

さて、今回確認された公印等には、上述の永久保存印鑑(9本)のほかに「名古屋大学」の石印も含まれていました(写真6)。この学印が収められていた封筒には、同学印が1947年10月1日から1959年3月24日まで使用されていたとのメモ書きがあります。学内に残された記録によると、この学印は当時の卒業証書や学位記等に使用されていましたが、摩滅が著しいため改刻することが1958年12月に決裁されています。その後、新たに彫刻された学印(印材は柘植、印面外寸60mm平方)は、翌年3月18日に制定され、同月25日から旧印に替えて使用されるようになりました。



1	2	5
3	4	6

- 1 総務課に保管されていた学印等
- 2 原議書「印鑑の保存について」(1957年1月29日付)
- 3、4 同上別紙に押捺された印影(全9個)
- 5 「名古屋帝国大学」および「名古屋医科大学」印面
- 6 「名古屋大学」印面



名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.162

2006年11月

第2回名古屋大学ホームカミングデイを開催



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

55 『八高生のぞ記』 —旧制高校生たちの学園生活—

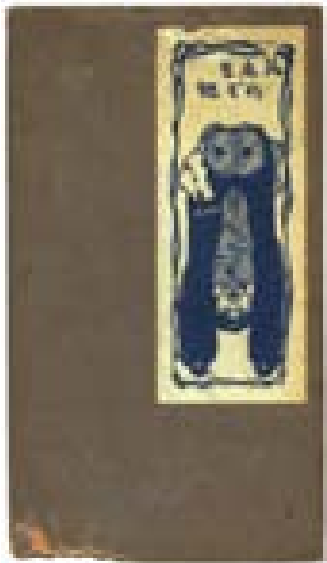
旧制高等学校のナンバースクールは、戦前における超エリート養成学校です。卒業生のほとんどが帝国大学に進学し、各界の指導者として活躍しました。名古屋にあったのが、1908(明治41)年、現在の名古屋市立大学瑞穂キャンパスに創設された第八高等学校(八高)です。戦後は名大教養部となりましたが、戦前も3年間の教養教育機関であり、名大教養教育のルーツといえます。

その八高生の学園生活を、風刺をきかせながら描いた漫画集が『八高生のぞ記』です。1928(昭和3)年の創立20周年記念祭で売り出されたもので、経本のようなじゃばら式にとじた画帖の形式になっています。はがき大の漫画は全部で24点あり、入学から卒業まで、学寮を中心に当時の学校生活のエッセンスが詰めこまれ、活気に満ちた生活がいきいきと描き出されています。また、キャプションとして、

ユニークな短文の寸評もついています。昭和初期の時代における、旧制高校の学生文化史・生活史の貴重な史料です。

これは『八高五十年誌』(1958年)に再録され、現在では八高会(第八高等学校同窓会)の機関紙『伊吹おろし』に連載の紹介コーナーがありますが、八高卒業生以外にはあまり知られていません。『名古屋大学大学文書資料室ニュース』第18号(昨年3月発行)には、加藤鉦治室長(当時)による詳細な紹介文が掲載されています。

最近になって、卒業生の遺品の中から、「八高生のぞき」が発見されました。題名は似ていますが、こちらは14枚の絵はがきであり、内容も講義や部活動など幅広いことが特徴です。こちらでも作者や制作経緯などが分からず、謎の多い史料でもあります。



1	3	4
2		

- 『八高生のぞ記』の表紙
- 「4. コンパ 胃袋の現化が無けなしの財布の塵迄はたいて菓子を買ひ、Y談X談隠芸等々に頑張るところは仲々の見物である…」
- 「6. 寮雨 時間と労力の経済のために、我輩等最も卓越せる人格者は寮雨と称する至極便利な方法で、身を軽くし…」
- 「13. 試験の前夜 さア、普段すつかり怠けてあるので、試験の前にはステンに頑張る。見る間に頭が膨張して、流星は秀才だ…」

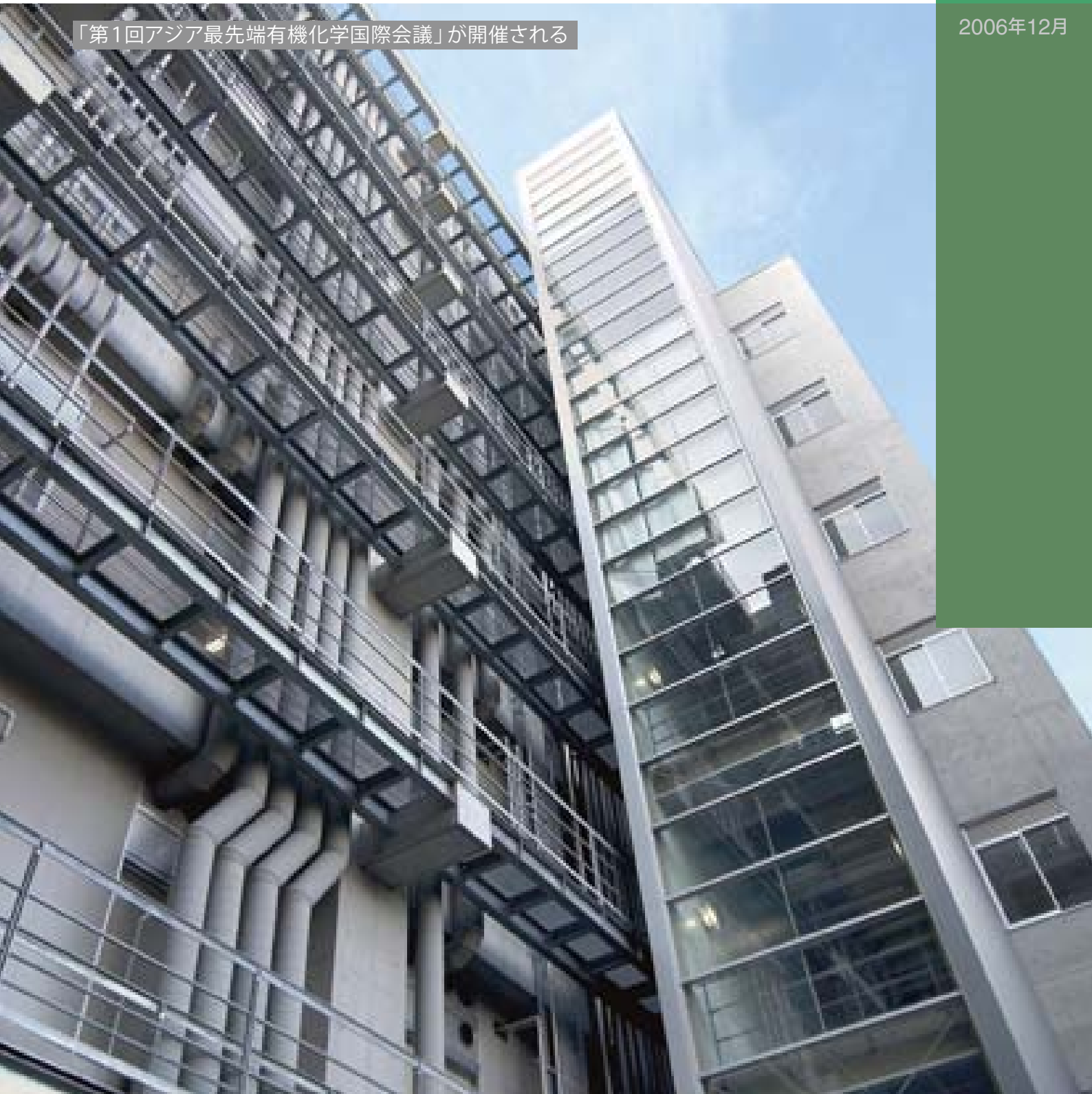
名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.163

2006年12月

「第1回アジア最先端有機化学国際会議」が開催される



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

56 豊田講堂地階倉庫

本学のシンボルの一つでもある豊田講堂については、本連載で何度か取り上げました。今回は、少し角度をかえて豊田講堂の地階倉庫について取り上げます。

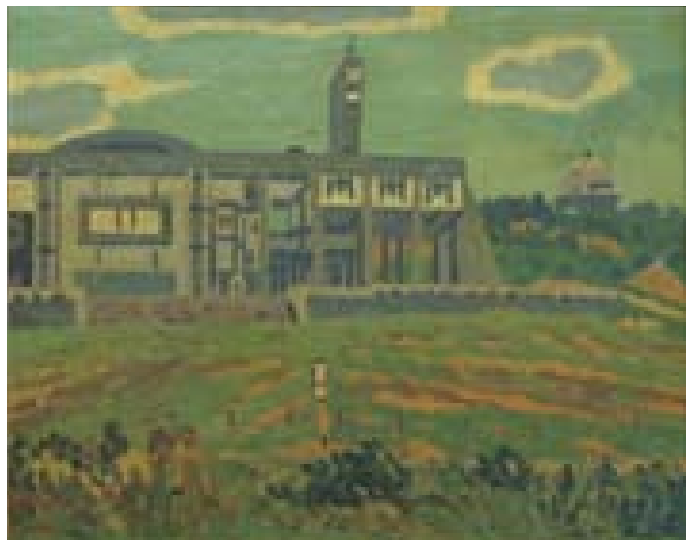
一般の人々にはあまり知られていませんが、豊田講堂のロビーやピロティの下（地階）には、総面積約500㎡の倉庫エリアがあります（写真1、2）。本連載36号で紹介した「田村模型」は、2005（平成17）年2月にこの地階倉庫内で発見されたものです（写真3）。

ところで、1960年に竣工した豊田講堂は、2006年12月から約1年の工期予定で、大規模な改修工事を受けることになっています。これに先立って、今年の夏から秋にかけて豊田講堂内の備品等の整理・搬出作業が断続的に行われました。その際、大学文書資料室では、「田村模型」の事例もあるため、特に地階倉庫内で人目につかず長年保存されている大学史関連の資料が存在するのではないかと半ば期待を寄せていました。

事務局職員の手で進められた整理作業では多くの備品類とともに古い事務文書や印刷物在庫などの存在が確認され、それらのうち記録史料としての価値が認められるものについては大学文書資料室で保管することになりました。

写真4の豊田講堂の油彩画は、この整理作業で存在が確認されたものです。この油彩画は、木製の額に入れられていますが、作者ならびに制作時期は不明です。豊田講堂の手前（西）側に描かれているバス停周辺の景色から判断して、竣工数年後の様子を描いたものだと思います。

竣工後46年を経た豊田講堂は、時の流れとともにその地階倉庫部分がタイムカプセルのような役割を果たしたともいえるのではないのでしょうか。今回の改修後、現在の地階倉庫部分のうち約2/3の部分が控室として整備される予定ですが、残る倉庫部分にまた新たなタイムカプセルが生まれることがあるのかもしれませんが。



1	2
3	4

- 1、2 豊田講堂の地階倉庫入口
および倉庫内の通路
- 3 発見された当時の「田村模型」
- 4 豊田講堂画（油彩、F15号）

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.164

2007年1月

平成19年 平野総長年頭あいさつ「新年を迎えて」



57 後藤新平の自筆書掛け軸—後藤と愛知医学校教師柴田^{しょうへい}邵平—

後藤新平（1857-1929）は、衛生・植民地・都市行政などに大きな足跡を残すとともに、内務大臣や外務大臣などを歴任した、近代日本を代表する官僚・政治家の1人です。

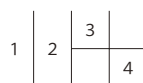
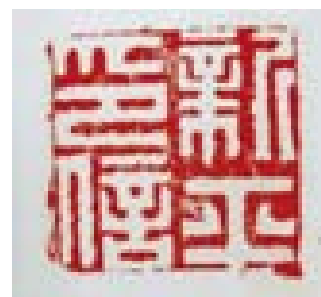
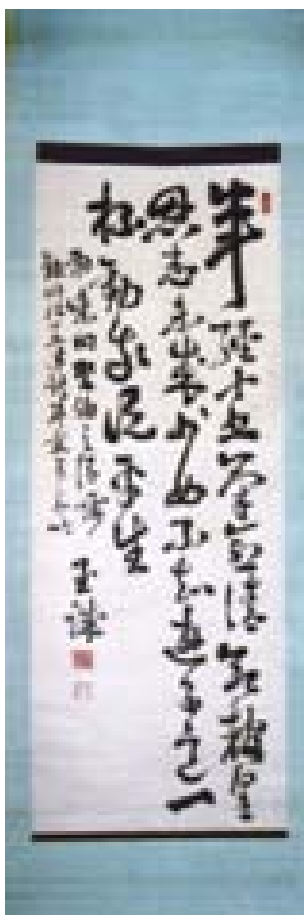
戊辰戦争で明治政府に敵対した水沢藩に生まれて苦学した後藤が、1876（明治9）年に初めて就職したのが、名大医学部の源流にあたる愛知県公立病院（のち愛知病院）でした。そして1881年には、24歳の若さで、愛知医学校長兼愛知病院長に就任しています。83年には名古屋を去った後藤ですが、愛知医学校の基礎を確立し、全国でも有数の医学校とすることに力を尽くしました。

今回紹介するのは、後藤の揮毫書をあしらった2つの掛け軸で、書は愛知医学校時代の後藤が一等助教諭柴田邵平に贈ったものです。いずれも、柴田の子孫の方々が所蔵されています。写真2の掛け軸の裏書に「逋信大臣後藤新平男ノ書」とあることから、後藤が逋信大臣の時期（1908年

から1913年にかけて）に掛け軸にしたものと考えられます。

柴田邵平（1825-1898）は、日本や東海地方の西洋医学・医療の発展に大きな役割を果たした人物です。尾張国で育ち、京都や江戸で西洋医学を学んだあと、1873（明治6）年に名古屋仮病院の当直医となり、その翌年には医学校創立係に任命されて、愛知医学校の創立に深く関わりました。医学校創立後も教員として残り、若い後藤校長を支えました。写真1の書の奥書には、明治15年の「新年宴会」で、後藤が柴田のために即興で詠んだものを献じたとあり、2人の親密さがうかがえます。

所蔵者の1人である柴田義守氏からは、柴田邵平の蔵書や個人資料などからなる、1,000点近い資料が大学文書資料室に寄贈されました。現在、漸次公開を進めつつあります。



- 1 柴田光子氏（玄孫、柴田整形外科院長）所蔵
読み下し文：年経ること十五 愈々清し、只だ皇恩に報いんとするも志未だ成らず、少女知らず遊子の意、一杯我に勤め平生に沃く
- 2 柴田義守氏（曾孫、元愛知県厚生連海南病院副院長兼整形外科部長）所蔵
読み下し文：人の為に善を謀るは是れ公道、未だ^{おと}背て章句の中に求めず、良将良医豈に其れ異ならんや、杏林到る如花風有り
- 3 愛知医学校長時代の後藤新平（後藤新平記念館所蔵、この頃からヒゲをたくわえはじめた）
- 4 両書に捺された後藤新平の落款（新平印信）
※漢詩の読み下しには、杉山理事の協力を得ました。

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.165

2007年2月

山本理事が第1回日中大学学術フォーラムに出席



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.166

2007年3月

「分析・診断医工学による予防早期医療の創成」プロジェクト
キックオフシンポジウムを開催



59 農学部旧安城キャンパス記念碑

昨年、1951（昭和26）年から1966年まで名大農学部があった旧安城キャンパスの跡地、安城市総合運動公園（安城市新田町）に、「名古屋大学農学部創設発展跡地之碑」が建てられました。

一昨年6月、農学部第1回卒業生の卒業50周年祝賀会が開かれました。これをきっかけに、第1回卒業生から記念碑建立の提案がなされ、昨年3月、瓜谷郁三名誉教授を会長とし、安城時代の教職員、第1回卒業生、鈴木國夫農学部同窓会会長、松田大学院生命農学研究科長などを委員とする、名古屋大学農学部創設発展記念会発起人会が発足しました。

そして6月には、瓜谷会長から神谷学安城市長に対し、農学部跡地への記念碑建設の要望書が提出されました。「日本デンマーク」と呼ばれた安城市（当時安城町）は、農学部を熱心に誘致し、附属農場も安城町の提供によるものでした。また、1935（昭和10）年に設立された産業組合

（現農協）立の安城更生病院には、医学部の前身の名古屋医科大学が全面的な支援を行うなど、名大と安城は戦前から浅からぬ関係がありました。今回も、安城市のご好意により、敷地が無償貸与されています。

建設費については、安城時代の関係者を中心に募られましたが、3ヵ月の間に目標額を上回る募金が集まり、昨年11月11日に、神谷安城市長、発起人会メンバーのほか、115名の臨席を得て除幕式が行われました。

現在、名大農学部時代の面影をしのばせるものといえば、当時テニスコートの隣にあった松林の一部のみで、記念碑もその近くに建てられました。すでにここには、農学部の前に同地にあった愛知青年師範学校（戦後愛知学芸大学安城分校）の記念碑があります。今回の建碑によって、農学部の基礎を築いた安城時代の記憶を残すとともに、この地の由緒の記憶も1つにつながったといえるでしょう。



1	2
3	

- 1 今回建てられた記念碑（白御影石、95×170×95cm）。後ろに見えるのが愛知青年師範学校の記念碑。
- 2 除幕式の記念写真。安城市総合運動公園は、名鉄新安城駅もしくはJR安城駅から名鉄バスで10分（「総合運動公園」下車）。記念碑は、公園の西端、野球場の西側にある。
- 3 安城キャンパスの航空写真。写真中の赤丸の地点に記念碑が建てられた。その下方に現在ごく一部が残る松林が見える。

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.167

2007年4月

平成18年度卒業式を挙



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

60 名古屋帝国大学初代総長澁澤元治関係資料

澁澤元治（1876－1975）は、「日本の近代資本主義の父」といわれる澁澤栄一を叔父にもつ人物で、戦時下の多難な時代に創設された名帝大の初代総長（1939－1946）として、草創期本学の基礎づくりに尽力しました。

澁澤は、東京帝国大学工科大学（電気工学科）を卒業後、叔父栄一に随行して欧米を外遊し、帰国後は逓信省に勤務しました。この逓信省時代に工学博士学位を取得し、のちに東京帝国大学教授を兼任しながら逓信省電気局技術課長に任命されていた時期もありました。

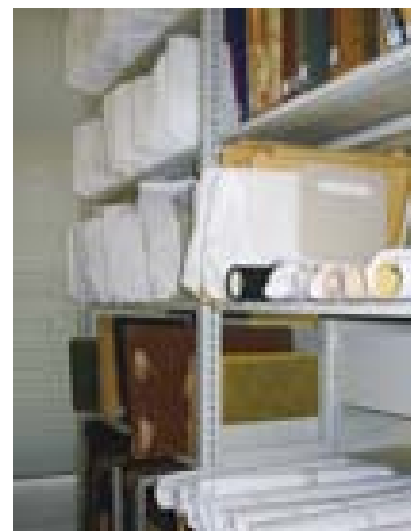
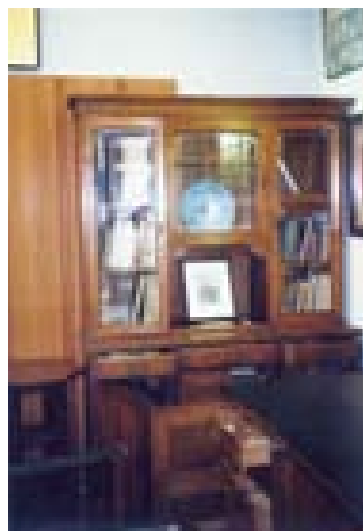
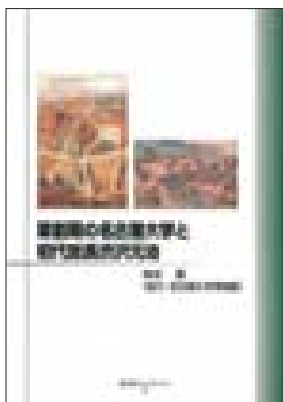
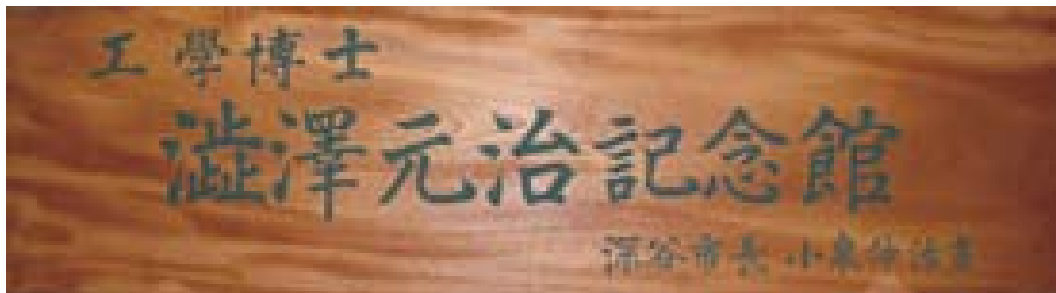
澁澤の生涯等については自著『五十年の回顧』（1953）・『思い出の随想』（1974）のほか、手近なものとしては大学文書資料室発行の名大史ブックレット6（デジタルブック版・冊子版）などで知ることができます。

1955（昭和30）年、澁澤は電気事業行政および電気工学技術の研究教育における功績が評価されて、電気関係者として初めて文化功労賞を受賞しました。この受賞を契機に

有志によって「澁澤元治博士文化功労賞受賞記念事業委員会」が設置され、翌56年に「澁澤賞」が創設されて今日に至っています。

澁澤元治の没後10年にあたる1985年、ご遺族が深谷市の澁澤生家敷地内に、日本語教育や国際親善などを目的とした外国人留学生のための「澁澤国際学園」が開校しました。そしてこの学園のなかに「澁澤元治記念館」が設置され、澁澤元治が生前使っていた机・椅子などの品々や蔵書・アルバム・書簡などが保存展示されていました。

その後、同記念館はご遺族が他界されたこともあって、2000年の春に閉館となりました。閉館後、残された資料の保存管理が問題となりましたが、多くの関係者の協力もあって2001年3月にその資料が名古屋大学に寄贈されることになり、現在は大学文書資料室がその管理を行っています。なお、大学文書資料室では、今年度からこの澁澤関係資料の一般公開を行っています。



2

1 | 3 | 4

- 1 名大史ブックレット6
(デジタルブック版は<http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp/booklet/>)
- 2 「澁澤元治記念館」看板（たて約50cm×よこ約180cm）
- 3 澁澤元治記念館内の展示のようす
- 4 大学文書資料室に移管された澁澤元治関係資料（一部）